ゲテモノ

知与古　朽木

「げっ」

ノストラダムスの大予言から二十年も経とうとしているにも関わらず、このような死語で文章を始めてしまって、本当に申し訳ない。けれども、昼飯でも食べようか、と財布の中身を確認した時、三百円しかなかったら、このような声も出てしまうというものだ。

今月は飲み会だの旅行だの、とどうも遊びすぎてしまった。バイトの給料は明日に入るから、困った状況ではないけど、少なくとも、今日の昼飯は貧相なものになりそうだ。はぁ、こんな三百円ぽっちで何を食えばいいのだろうか。一本で十円のナニガシ棒を三十なんて、小学生じゃあるまいし、大学生になった男が選ぶ選択肢ではない。

食べるのはもうやめよう。中途半端に食べたって余計にひもじさが際立つだけだ。二時間目の授業を終えた今、僕はもう何もないのだから散歩でもしようか。

ここから僕の住んでいる築四十年オンボロアパートまでは、歩いて二十分程度で着いてしまうが、南側からぐるっと回って川沿いを歩くように遠回りして帰ろう。

この川は、そんな大層な川ではなく、川幅が五メートルにも満たない小さなドブ川だ。名前は……あるにはあるのだろうが聞いたこともないし、どこかに銘打ってあるわけでもない。周りに田んぼが少しだけあるような、変哲もない川だ。ザリガニだのちょっとした魚だのはいるかもしれない。この前、馬鹿みたいに声をあげながら釣りをしている小学生男子らを見かけた。

この三百円、どうしようか。微妙な金額を持っているとどうも落ち着かない。適当にそこらの自動販売機で、サイダーでも買って帰ろうか。ん、何だあのおじさん。

「ちょっと、ちょっと、きみ、これ、買わないか」

「へ？」

＊

「で、買ったもんがこのブレスレットってか、正二」

学校終わりの夕方、僕の部屋の半分を占領しかねない小太り(僕の部屋が狭過ぎるから余計太って見えるのだ、故に俺は小太りである、というのが体重九十キログラム越えの彼の主張である)眼鏡の男が呆れ顔で聞いてくる。

「しかし、おまえこんなもん買う趣味あったのかよ」

「うるさいなぁ、三木。さっきも言っただろう。半端なお金があったから、興味本位で買っちゃったんだよ」

だからっつったってなぁ、とまだ、三木はぶつぶつ言っている。大食らいの癖に、細かいこと気にしすぎなんだよ。この前なんか、丼物屋で上に乗っているものが牛か豚かなんてお構いなしだったじゃないか。あっ、僕のブレスレットを雑に放りやがった。

改めて、怪しいおじさんから買ったブレスレットを見つめる。と言っても、大した特徴なんかはない。三ミリメートルほどの薄汚れた革紐に、青っぽい、見る角度によっては緑にも見える石が付いているだけだ。ちょうど三百円でいいとのことだったし、付いている石に少し惹かれる所があったから買ってしまったのだ。

「金を軽く見すぎなんだよ、正二、お前は。今日か、明日か、いつの日か、痛い目見んぞ。三百円つったらなぁ、菓子の棒が三十本も買えるぞ、おい」

お金の話を棒の話に置き換えた時点で、説得力がなくなるのに、みんなして何となく使ってしまうのは不思議である。

「大学生にもなった男がする話じゃあ……」

「ばっか、お前。棒、舐めてんじゃあねえぞ。常に、十円になるように作る隠れた企業努力がだな。それに、あ

れだけの種類の味を生み出す発想力も尊敬に値するし、あとそれにだなぁ……」
「ごめん、分かった。僕が悪かった。二度と棒のことを蔑んだりしないし、今度買ってあげるから、な」
「納豆味な」
微妙に外してくるな。それに、コンビニとかそこらで買いやすい味にしてくれないかな。
「あと、ピザ」
足すな。それに、ピザは三木のことじゃあないか。
「俺は太ってんじゃなくて、小太りなんだよ」
エスパーかな。僕は笑って誤魔化すことにする。
「ハハッ、そんなこと思っているわけないじゃあないか。ええ、我が唯一にして無二の友よ」
「フン、心にもないこと言いやがって」
そう言って、コンビニの袋の中から、ポテトチップスを取り出して、鷲掴みにバリバリと食べだした。あぁ、畳にボロボロとかすを落として。誰の家だと思っているんだ。
ここは、三木に恐ろしくも素晴らしい事実を伝えて、その口を閉じてもらおう。精一杯眉間に皺を寄せて、キリリとした顔を作り、ブレスレットを手首に結んだ。
「三木みたいな、脳が脂肪に押し潰されている奴にはわからないだろうが、このブレスレットには、素晴らしい効果があるのだよ」
「急になんだよ、効果って。もっと胡散臭くなってきたなそいつ。どうせ、幸せになるだの、金持ちになるだの、そんなもんだろ。悲しいね、こんな詐欺商法に引っかかるやつが知り合いの中にいるなんて。まったく、情けない」
「想像力が乏しいね、三木君。このブレスレットはそんなチャチなところには収まらないのだよ。こいつの効果はなぁ、ずばり……」
ガサガサッ
台所の方で、何か嫌な音がした。
「おいおい、なんだ。ゴキブリでも飼ってんのか」
「そんな訳ないだろう。気持ちの悪いこと言うなよ」
実際、虫が大の苦手な僕は気が気でなかった。奴らはいくら気を付けていても湧いてくる。今日の朝刊を丸めて持って、そろそろと台所へ入った。
「なぁ、ゴキブリいたか」
「シッ、声を出すんじゃあない。そして、その忌々しい名前も口に出すな。増えたらどう責任取ってくれるんだ」
「名前言ったぐらいで増えてたまるか」
三木は何もわかっちゃいない。科学の世界に生きる我々だが、それでも未だすべてを解明しきったわけではない。その代表があの、仮に這いよる混沌と呼ぶが、奴である。奴は、さっきも言ったが、どうやっても湧いてくる。いくら戸締りをしようが、液体の如く隙間を這って、我らが安息の居住地を侵犯してくるのだ。加えて、あの這いよる混沌は、未確認事項であるが、言霊によって召喚されうるものだ。一度、あの恐ろしい響きを持つ名を呼ぶと、その言の葉の霊力によって、一点へと集まり、繁殖を始めるのだ。また、「一・三十の業」というものがある。これは先程の言霊に近いものだが、奴らは、我々人類に一匹見たら三十匹居るということを信じ込ませることに成功したのである。方法は定かではないが、そこは重要ではない。我々の無意識下にそのことが刷り込まれてしまったことが問題なのである。例えば、台所で一匹見たとしよう。本来、存在するのは、その一匹だけである。他に居ても数匹だろう。しかし、三十と定義づけをされてしまったことのよって、居るはずのない三十匹の存在が確定し、逆説的に発生してしまうのである。こうして、這い寄る混沌は指数的に数を伸ばしている。さらに、奴は進化の途上にあることを忘れるなかれ。這いよる混沌は、丸めた新聞紙という死に直面した時に、その黒光りする甲の内に格納されたる薄い翅を形容し難いほど悍ましくばたつかせ、飛びかかり、カミカゼを決めてくるのである。しかも、奴らの生命力は、悪魔的である。特殊派遣員のレポートによると、信じ難いことだが、頭部と胴体が二つに分かれてしまっても、恐ろしい西洋の怪物、デュラハンよろしく動き回ることが報告されている。対生物兵器である電子レンジにかけても死なない耐熱性を獲得し、噂では、唯一の弱点、寒さに対しても耐性を持ちつつある、とまことしやかに囁かれている。最後の聖域、北海道が混沌の渦に飲まれるのもそう遠くない未来なのかもしれない。あぁ、神は何故このような生命を創り出したもうたのか。エリ・エリ・ラマ・サバクタニ。我々はこの混沌とした浮世を這いよる混沌と共に、どれだけの時を生活をしていかなければならいのか。信じるか信じないかはあなた――。
「突っ立って何してんだよ。逃げられたら手が付けられなくなるかもしれんぞ」
ハッと我に返った。僕は今、いったい何を……
まぁいい。奴らとの戦は熾烈を極めるだろう。気を取り直してっと。
「グギャッ」
極彩色の怪鳥が上げる鳴き声のような悲鳴を上げたのは、奴を見つけた僕ではない。三木だ。
「痛でででででで」
三木の見るに堪えない腹に赤いブローチが付いている

のが見える。あんなこと言った割には、自分もアクセサリーを持っているじゃあないか。
「三木もブローチみたいなアクセ持ってんだ」
涙目で反論してきた。
「ちげーよ。よく見ろよ。何のために目が二つも付いてんだよ。片方ぐらいまともなもんであるようにってことじゃあないのか」
眼鏡かけたお前は両方とも不良品な癖によく言う。しかし、三木の言う通り、よく見るとブローチにしては形が異様というか、鋏みたいなものが付いているっていうか、まるっきりザリガニである。
「正二、こんなもんいつから飼ってたんだよ。先週にはいなかったろうが」
「いや、ザリガニなんか飼ってないけど」
現にここにいるだろうが、と腹を鋏でつまんでいるザリガニをはがそうと躍起になっているが、はがせない。
「ちょっと、見てねぇで手伝ってくれよ」
ガサガサッ
そこだっ。僕のこれからの野球人生の全てを失ってもいい、と肩が壊れる勢いで、シンクの中に新聞紙を叩き込んだ。
「俺の話を聞けよ。おい」
ガシッッ
なん……だと……。そこにいたのは奴、ではなくて、僕の渾身のフルスイングを、片鋏で受け止めたザリガニだった。
腹をさすりながら、三木が立ち上がってきた。
「痛って、痕ついちまったよもう。なんだ仕留めたのか、って、げっ」
三木も相当なプロトタイプらしい。古臭い表現を二度も使う羽目になるとは。
「なんだって二匹もザリガニがいるんだ。食うのか」
食う訳あるか。
「僕だってそこまで困ってない。なんだよこいつらどっから来たんだ」
「そうなのか。食ったら意外と美味そうだがなぁ」
呑気な独り言だ。
ふっ、と決して日当たりがいいとは言えない部屋がより暗くなった。窓を見ると外が臙脂色に染まっている。
キャー！
ガスコンロが一口しかない台所に三木の悲鳴（女のような悲鳴だが、こう表現するのが正しい）が響き渡る。太いだけあっていい声している。じゃあなく、外の景色がわさわさと蠢いている。信じることが出来ないが、ザリガニがビッシリと窓に張り付いているのだ。
「おい正二、なんだよあれぇ」
情けない声だ。
「ザ、ザリガニだろう」
僕の声は決して震えていない。決して。
「そんなこと聞いてんじゃあねぇよ。なんであんなにいるのかって聞いてんだよっ」
防音効果など微塵も見込めない薄い窓がガタガタと軋み始めた。
「ヤバいぞ。窓が保たない」
ガシャーン
赤い奴らが泥臭さと共に、部屋に流れ込んできた。と、同時に、慌てた三木が、立て付けの悪いドアを蹴り破って（バイバイ敷金礼金）外へと一緒にゴロゴロと逃げだした。
「あいつら、ついてくんぞ」
ドタドタと狭い路地を走る僕たちの後ろを埋めるように、ザリガニが追いかけてくる。軽く数百匹は超えているだろうか。
横に並んで走る三木が聞いてくる。
「どこに逃げんだよ」
意外と足速いなお前。
「とにかく走れ」
ザリガニも負けず劣らずぴったりついてくる。あいつらに追いつかれたら碌なことにならない気がする。僕の全身全霊の一撃を受け止めるような奴だし、僕らを切り刻んできてもおかしくないのでは。
角をこれまでの陸上競技人生最高のカーブを決めた先は、例の名もわからぬドブ川である。
「何考えてんだよ、あの川なんてめちゃくちゃにザリガニ居そうじゃねぇかよ」
ゼェハァ。ゼェハァ。来てしまったものは仕方がないだろう、と言いたいところだが、息が切れてそれどころではない。
けれども、川からザリガニが上がってくる様子はなさそうだ。後ろに全部いるのかもしれないが、挟まれるよりはましだろう。
前方遠くの方で、犬を散歩中の爺さんがこちらを見て微笑んでいる。傍から見たら、夕暮れに全力疾走する若者二人、青春ドラマのワンシーンのように違いない。あんたの犬、すごい勢いで吠えてるぞ。気づけ。
「おい、あそこ入ろうぜ」
三木が田んぼ脇の納屋を指す。僕の部屋より頑丈そうだ。走るのも限界に近づいてきた。
「乗った」
短く返事して、納屋の扉に飛びついた。しめた、鍵は

掛かっていない。中に転がり込んで、閂をしっかりと下ろした。しかし、納屋といっても小さいもので、農具が多く、三木と入るとあまり余裕がない。
「どうしてこうなったんだ。俺が何したってんだ」
「ゼェハァ。ザリガニが、美味そうって、思ったからじゃあ、ないか」
「ンな訳あるか。人の所為にしてるが、実は、お前の所為なんじゃあないのか」
ギクッ
やはりエスパーなのか。僕には、こんな状況に陥ったことに思い当たる節がある。いや、確実にそうだろう。
「そういやぁ、そのブレスレット何かご利益があるとかないとか言ってなかったか。もしやそいつが……」
「いやいや、まさかそんな。これはつけると甲殻類に好かれるってものだし……」
ブチッと何かが切れる音がした気がする。これが堪忍袋の切れる音かぁ、勉強になるなぁ。
「明らかにそれの所為だっ。チッ、お前の巻き添えかよ。変なもん買ってきてんじゃあねぇよ。この昼行燈」
三木が大口開けて怒り出す。巨躯も相まってさながらヒグマだ。
「そんなに怒らないでくれよ」
「ここで怒らずして、どこで怒るんだ。あ、そうだ。さっさとそいつ外しちまえよ。そしたら、奴らどっかに行くんじゃねぇか」
そうか。慌てて気づくことができなかった。ようし、じゃあこいつに手をかけて。
ググッ
「おい、まだか。扉がガタガタいってるぞ。早くしろ。」
扉にザリガニがバシバシと体当たりをしているようだ。急がねば。おっと、ブレスレットは手首に合わせて結んだんだった。普段はこういったものをつけないから失念していた。
「ちょっと待ってくれ。ここをこうしてって、あ……」
結び目が硬くてほどけない。固結びするもんじゃないのか、これ。
「馬鹿何やってんだよ。ミサンガとは違うんだよ、この考え無しめが。常識ってもんがねぇのかよ、この盆暗が」
「確かに悪かったけど、言い過ぎじゃあないか。別に悪気があった訳じゃあないんだぞ」
「お前の所為だってのに、言い返してんなよ。これからどうすんだ。ケータイもないから助けも呼べねえし。ザリガニどもに食われろってのか。あぁ、もう。ザリガニって肉食だったよなぁ、食う側じゃなく、食われる側にこの俺が回っちまうなんて。なんてついてないんだ」
「そんなに気を落とすなよ」
「誰の所為だと思ってんだよっ。そうだ。こいつらの目的は、ブレスレットをつけた正二じゃないか。俺は抜けるぞ。さらばだ、正二君」
「そんな薄情な。世間は道連れ、余は情け。毒を食らわば皿までだろう。三木、待ってくれよ。棒ならいくらでも奢るからさぁ、なぁ」
「華の大学生にもなって棒の話してんじゃあねぇ。恥ずかしくないのか、全く」
「僕の家で、棒がいかにすごいか力説してたじゃないか。適当なこと言いやがって。ああ、いいさ。もうどこへでも行っちまえよ、この、デブッ」
「俺は小太りだっ」
バコンッ
「「キャー!」」二人して情けない声だ。扉がもう限界を迎えたらしい。嗚呼、このまま僕らは食べられてしまうのだろうか。さようなら、みなさん。さようなら、三木。さようなら、僕。来世では、お金のご利用は計画的に。

＊

「ハイッ、本日は今、巷で噂のレストラン、『スティック』の方にお邪魔しております。こちらのレストラン、意外な食材を使用して、人気が出ているようなのですが……。では、早速、入ってみましょう。ごめんくださーい」
若い女性レポーターがおかしなデザインの、やけに頑丈そうな鉄製の扉を開ける。
「いらっしゃいませ」
入ると、不透明で大きな水槽とレポーターの三倍の大きさはある腹をゆさゆさせながら白のエプロン、眼鏡の大男が出迎える。お察しの通り、彼がこの店のオーナーの三木である。
「本日は取材を受けてくださってありがとうございます。すいません。どちらの席で……」
「はい、こちらに。ご案内いたします」
「ありがとうございます」
店内は小綺麗にまとめられているが、他の個人経営の料理店と比べ、いろいろと広め、大きめに作られている。オーナーの趣味なのか、または、オーナーが通りやすいためか、レポーターも気になったのだろう。遠慮することなく聞いている。
「お店、広いですね。何かこだわりがあるんですか」
「私が痩せて見えるためですよ」
レポーターはきょとんとしている。それもそうだろう。部屋が広いからと言って、太った人間が痩せて見えるわけがない。店の一番奥、角のテーブルに案内し終えると、厨房の扉の奥へと引っ込んだ。

ロケスタッフがガチャガチャと照明の準備をしたりなんだりしている。撮影を始めるのだろう。レポーターもメイクを確認して気合を入れている。
「はい。店内に入ってまいりましたが、広いですねぇ。椅子も大きめで座りやすく、居心地は最高です。さて、どのような料理が出てくるのか楽しみです」
三木が厨房からこれまた大きな皿を持って（やはり痩せては見えない）恭しくと歩いてくる。
「お待たせいたしました」
「わぁ、これは」
これは皿の上に茹でたザリガニを五匹、エビのように剥いた状態で、いくつかの調味料が添えられたシンプルな料理である。しかし、色彩的見た目は悪くないが、頭部と鋏がついたままなので、ゲテモノ感は拭いきれていない。
「ザリガ――」
「ジャパニーズ・ロブスターです」
間髪入れず、鼻につく言い方で三木の訂正が入る。
「――です。えぇ、私こちらのザリ「ジャパニーズ・ロブスター」――を食べるのは初なんですけど、いったいどのような味がするのでしょうか。早速、頂いていきたいと思います」
カタンッ
扉のほうで金属特有の乾いた音がしたのだが気づいた者はいなかった。

＊

「フゥ、とっても美味かったです。ザ……ジャパニーズ・ロブスターのこと、最初はどうなのかなと思っていたのですが、意外と食べやすい料理でした」
ロケも終盤のようである。三木オーナーも満足そうに脂ぎった鼻を膨らませている。
「えぇホント、このジャパニーズ・ロブスターの泥臭さを消すのには苦労しましたよ。他にも……」
カタンッ
また扉のほうから金属音がした。三木の話にあまり興味が無かったのだろう。さすがに気が付いたようだ。
「何ですか、今の音」
「ん、あぁ、気にしなくていいですよ。それに、他に質問があるんじゃあないですか」
「そうでした。それじゃあ、最後の質問になるんですけど、このレストランを開業するにあたって、感謝なさっているお方はいらっしゃいますか」
「それはもう、あいつですね。大学で出会った友人なんですが、材料費が浮いて助かっていますよ」
「へぇ、一緒に経営しているんですね。食材調達担当なんですか」
カタンッ
彼女の視線はどうしてもそちらのほうへ向いてしまう。
「気になってしょうがないみたいですね。まぁちょうどいいです。一緒に友人を紹介しますよ。こちらにどうぞ」
三木は、店の入り口の方へと案内しだした。そちらには頑丈そうな鉄の扉と水槽しかない。と、思ったが、英語でＷＥＬＣＯＭＥと書かれたマットの上を、ザリガニが悠々と歩いているではないか。
「あ、逃げ出しちゃってますよ」
三木がひょいッとザリガニをつまんで水槽へ入れる。
「こいつは逃げ出したんじゃあないですよ。私の店に、やって来たんです」
レポーターはわからないとでも言うように首を傾ける。
カタンッ
ここでレポーター達は、この金属音の意味を理解した。鉄の扉の真ん中より少し下に、郵便物の投函口のようなものがついており、そこからザリガニが入ってきているのである。まさか、ザリガニ自ら調理されに来ているとでもいうのだろうか。レポーターは言いようのない恐怖を覚えつつある。
「ど、どういうことですか、これ」
「水槽の中、覗いてみてください。青っぽい石が見えませんか。あれが、ザリガニを呼び寄せているんですよ」
「そんなこと、本当にあるんですか」
三木の眼が、潤みを帯びて、怪しく光りだした。
「そいつは今も見たでしょう。本当なんだ。この石は、こいつらを呼び寄せる。こいつの所為で、俺の……。あぁ、そうだ。友達を紹介しなくっちゃあいけませんね。あなたたちも気になっているようですし。けれど、俺は、彼を置いて、逃げたしたんです。奴らのヌルヌルとした、それでいて、怪しくも魅力のある甲が彼を覆いつくすのを見ました。奴ら、キシキシ、ガシャガシャと不快な音を立てて、彼を覆いつくすのを見ました。水槽の中をよおく見てください。石に革ひもがついていませんか。その革ひも、何かに巻き付いていませんか。それは、あいつの、俺の友人の……」
確かによくのぞいてみると、石は何か木のようなものに巻き付いているようだ。先端の方は……ザリガニでよく見えないが、五つに枝分かれして、指のように見えなくもない。レポーターの顔は蒼白であった。まさか、人間だとでも言うのか。ここのオーナーは水槽の中に人間の腕を、しかも、かつての友人の腕を入れていると言うのか。しかし、石は青く、時折、緑色に、妖艶に光を反射させている。レポーターは恐怖に震えながらも、水槽

の、中を、覗かずには……。
バンッ
「勝手に殺すな」
厨房の扉を勢いよく開けた。
「なんだよ正二、良いところだったのに」
「良いところじゃあないだろ、そいつは秘密にするべきだって話し合ったじゃないか」
「細かいこと気にするな」
「三木に言われたくない。何回も何回も確認しただろ」
「わかった、わかった。そんなに怒るなよ。あの後、鋏を持って助けに行ったの忘れたのか」
「確かに助かったけど、全身生傷だらけで、無事とは言えなかったぞ」
「棒奢ってやるから機嫌直せよ」
「僕はそんなに安くないんだよ」
「三百円のブレスレット買う癖にな」
呆気に取られていたスタッフ達が、詰め寄ってきた。
「彼女、泡吹いて気絶しちゃったじゃないか」
「げっ」